

川畑盛邦(の絵画)は、(中略)無意識に思考を書き取りをするシュールレアリスム手法に、重ね合わせてみることも可能だろう。彼は、制作に当たって、まず薄い色彩の濃淡で自動記述的にフォルムを生成させ、雲の形や壁の染みを見て様々な形象を連想するように、人物像を創り出し、大地を生み出す創作過程を選択しているからである。

この過程の選択には、表現スタイルの硬直を排し、造形や構成の発想と思索に向けて、柔軟で自由な精神活動を留保したいという意志が透けて見える。そこでは確かに、コンセプトの企図が薄まるリスクもあろうが、図と地を際立たせた作品や、抽象化した自然を強調する作品など、試作の領域を広く水平に展開していく姿勢をあえて崩していない。(中略)見る側は、彼の自在な創作手法からどのような絵画化が実現されるのか、その自動記述的手法の成果を期待することになる。

吉田豪介(美術評論家)

ギャラリーどらーる企画個展案内状作者紹介文より抜粋 2004年9月



伝言板/
パネル アクリル 210×230 mm 2011年



風景'11-3/
パネル アクリル 260×210 mm 2011年



花と咲く/
パネル アクリル 290×240 mm 2011年



雲の上で星と遊ぶ／
パネル アクリル 220×180 mm 2011年



なんとなく遊ぶ／
パネル アクリル 180×355 mm 2011年



登る旭岳／
パネル アクリル 290×350 mm 2011年



人の風景Ⅲ/
パネル アクリル 280×290 mm 2011年



風景'05-X/
パネル アクリル 255×450 mm 2005年



うちを省みる/
パネル アクリル 205×505 mm 2005年